

# 2021 年度

## 国 語

最初に、以下の注意事項をよく読んでください。

1. 問題冊子は監督者の指示があるまでは開いてはいけません。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。問題冊子は受験番号のみを記入してください。
3. 試験問題の内容に関する質問には答えられません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。
5. 問題冊子および解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 漢字で書くべきところは漢字で書いてください。

受 験 番 号	
------------------	--

\*解答に字数制限がある場合は、句読点なども字数として数えます。

【一】 次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① セツドのある行動をとる。
- ② スイリ小説を読む。
- ③ 植木にヒリヨウをやる。
- ④ 山の木々がコウヨウする。
- ⑤ シンコクな話をする。
- ⑥ 一等地に店をカマえる。

問二 次の熟語と同じ成り立ちのものを一つ選び、記号で答えなさい。

〔停止〕

- ア、帰郷
- イ、豊富
- ウ、不足
- エ、必要

問三 次の中から意味が似ていることはを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 言動
- イ、応答
- ウ、思案
- エ、返事
- オ、質疑

問四 次の□に同じ漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

□事□難

問五 次の( )に共通して入る語を漢字一字で答えなさい。

たかねの( )。

( )をそえる。

話に( )を咲かせる。



で、早めに来て、なれておかないと緊張きんちやうしてしまうのだ。

ベンチに着くと、タツツがバッグからなぜだかガムテープを取り出した。

「なんでそんなもん持ってきてるんだよ」

そう和馬がたずねると、タツツはまじめな顔で答えた。

「今日の、うお座のラッキーアイテムなんだ」

「ふうん」

和馬たちは、試合前の肩かたならしのため、キャッチボールを始めた。その間にも、1 スタンドの様子をうかがう。

「あ、来た！」

観客席に、負けおばさんが姿を見せた。

キャッチボールをやめて、和馬はタタタツ、とかけ寄った。

「おばさん、こんにちは」

「あ、これ差し入れなのよ。よかったら食べてね」

と、お菓子かしのふくろをわたしてくれた。カレーせんべいだ。みんなが二、三枚ずつとってもまだ余りそうなほど、大きなふくらだった。

受け取ってから、和馬が目Bを（ ）てきよろきよろしていると――。

現れた！

ほうしをかぶっていて、ほっぺただけが2 赤い。細い目は少したれていて、3 ほほえんでいる。

「佐原のおじさーん、こっちは」

和馬は観客席の階段を下りて、通路まで行って手招きした。タツツがキャッチボールをやめてそばに寄ってきた。

「だれ？ おまえの親せき？」

小声で和馬は答えた。

「『負けおじさん』だよ」

「あ、えええ？ あの人が。おまえ、ほんとに会いに行ったのかよ」

「うん。きのう、サッカーグラウンドまで誘いまそに行ったんだ」

ちなみにそのグラウンドはけっこう遠かった。バスで行ったほうがいくらいだと思ったけれど、体力づくりのために、和馬はちゃんとランニングして往復したのだった。

「サッカーばかりじゃなくて、野球もおもしろいから、うちのチームを応援しにきてください、って誘ってみたんだ」

「ダメだろ、それ！ 負けパワーが倍になっちゃうじゃんか！」

タツツはそうどなつてから、あわてて口をおさえた。もう、「負けおじさん」はすぐそばまで来ていた。

「きみたちのチームは、なんていうんだい？」

「はい、七星少年野球チームっていいいます」

「七星テントウムシかい。ハハ」

おじさんはそうわらつてから、続けた。

「相手は？」

「一回戦は、西山田サンダースです」

「よし、七星テントウムシが勝てるよう願つて、せいっぱい応援するよ」

「おじさん、あそこにすわっているお婆さんは、いつも応援してくれる石岡いしおかさんなんです。ふたりで応援してくれたら、パワー倍増だな、って」

「よし、任せとけ」

負けお婆さんも立ち上がって、にこにことおじぎしている。

「まあ、いつもひとりぼっちで観戦してたのに、お仲間ができてうれしいわ」  
タツツが頭をC（ ）Cている。

「負けパワーが倍増しちゃうよ」

他のメンバーも、

「負けおばさん来てるぜ……」

とささやいている。タッツが

「しかも、和馬ってば、負けおじさんまで呼んじゃったんだ」

と喋ってしまったものだから、みんな

4

し始めた。

「そんなの、やばいに決まってるだろ」

「大量失点するぞ」

②「くそ、一回戦負けか……」

和馬は大きな声でいった。

「だいじょうぶ。きつと勝てる」

みんなふしぎそうな顔をしている。

せきばらいを一つして、和馬は続けた。

「マイナスとマイナスをかけ算すると、プラスになるって知ってるか？」

兄がいていたことだ。

「え」

みんな首をかしげている。

「中学になると習うんだ。数学の教科書に書いてあるんだよ」

なんでそうなるのかは聞かないでくれと、和馬は心のなかで思う。自分だってまだ正確にはよくわからないから。

「へえ……。で、それがどうしたんだよ」

とタッツ。和馬は説明を続けた。

「マイナスとマイナスをかけ算するっていうのはつまり、負けと負けをかけ算することだろ？」

「なるほど、つまりそれは……」

三尾みおがあごに手を当てながら考えている。

「つまり、負けおばさんと、負けおじさんがいっしょに応援してくれたら、プラスのパワーが出て、おれらは勝てるはずなんだよ」

「え、意味わかんね」

「どういうこと」

だから、それを聞かないでくれ、と和馬は心のなかでくり返した。

首をかしているメンバーも多いけれど、三尾がいつてくれた。

「なるほど。よくわかんねーけど、おれ、それを信じることにするわ！」

大きな声におされて、<sup>③</sup>みんながあいまいにうなずいた。

監督かんとくが集合をかける。

「さあ、きみらの力をありったけ出し切るんだ」

「はいっ！」

メンバー全員で円陣えんじんを組んだ。

「行くぜ、七星！」

試合が始まった。

初回、和馬たちは守備についた。ピッチャーの三尾は、試合が始まった直後に打たれることがちよくちよくある。野球では「立ち上がりが悪い」という言い方をする。

でも、今日の三尾はちがった。球がびゅんびゅん走って、相手のバッターはなんと三者連続で空振り三振さんしんだった。

「どうしたんだろ、おれ。なんかすげー力がみなぎってる」

三尾は、自分でふしぎがっている。

一回裏。一番バッターの和馬は、ドキドキしながら、打席に立った。自分がヒットを打てると、いい流れになることが多い。逆に、全然打てないと、他の打者にも調子の悪さが伝わってしまつて、1点も取れないで終わってしまうこともある。

ようし。とにかく思いきりやってみよう。

和馬は勢いよくバットをふつた。すると――。

当たった！ ボールはのびてのびて、広いグラウンドを高々と舞った。

なんと、フェンスに直撃して、はねかえつてきた。そんなロングヒットは練習でもめつたに打てないのに。

和馬は張り切って二塁をけて三塁に向かった。カッコよくスライディングが決まってセーフになった。試合でスリーベースヒットを打ったのは初めてだ。ベンチで監督が大きく左手を上げてガッツポーズしている。和馬も同じように、手をかかけた。

次のタツツも打った！ ライト前ヒットだ。和馬はゆうゆうと先制のホームをふむことができた。負けおばさんと負けおじさんが、ふたりとも立ち上がって拍手してくれている。

和馬は、ベンチにもどった。

「すげーな、おまえのいうとおりだ」

三尾が和馬の背中をらんぼうにボカんとたたいてきた。和馬はうなずいた。

「みんな、わかつたろ？ さつきいったとおりだ。この試合は必ず勝てるぞ！」

「負けおばさん」×「負けおじさん」のパワーが、本当にすごいことが、この後わかつた。

再びタツツがタイムリーヒットを打って、三尾もツーベースヒットを打って、他のメンバーも打ちまくって、なんと11―0で勝ってしまった。

「やったぜ、ふたりのおかげだ」

試合が終わって、和馬とタツツがハイタッチを交わしながらそっくりあっていたら、監督が、全員を呼び集めて、ミーティングが始まった。

負けたときの監督はうでぐみをするけれど、今日は勝つたので、こしに手を当ててニコニコしている。



「よくがんばったな。一か月前の練習試合とは、きみら、まるで別人のようだ」

④  
「でね」

三尾がぼそつとつぶやいて、わらった。するとそれが聞こえたみたいで、監督は、「それはどうか」といった。

「きみらが話していること、小耳にはさんだぞ。だれが負けを連れてくるとか、負けと負けがかけ合わさると勝ちになるとか、いろいろ縁起をかついでいるようだな」

「は……」

おこられるのかな。

和馬はタツツと目を合わせてからうつむいた。

「縁起をかつぐのはかまわん。かつぎたければ、かつげばいい」

監督は野球帽をかぶり直してから、続けた。

「ただ、ワタシが信じるのは自分の努力だ。⑤  
きみらがこの一か月、もうれつに努力してきたことを、ワタシは知っている。朝早く登校してグラウンドを走ったり、素振りをやったり」

たしかにそうだ、と和馬は試合までのことを思い出していた。負けおばさんのパワーに勝てるように、そんな練習をくり返したのだ。

「そういう努力はどんどん結果に現れる。そう、今日の試合に勝ったのは、きみらの努力の結果だとワタシは思っている。きみらが市大会で勝ちたいと、強く強く願ってがんばったからだ」

⑥  
「え……」

和馬たちは、思わず顔を見合わせた。

そうか。そうなんだろうか。

ほんとは「負けおばさん」も「負けおじさん」も自分たちの想像が生み出しただけで、がんばったから勝てた——そういうことなんだろうか？

ミーティングが終わってから、和馬と三尾とタツツの三人で、負けおばさんと負けおじさんのところに行った。ふたりは手をたたいて、むかえてくれた。

「いい試合だったわよ」

「きみら、すばらしいチームだね。サッカーもいいが、少年野球もおもしろいんだなと思ったよ。よかったら、また次の試合も応援させてくれ」

「そうね、わたしもぜひごいっしょさせてね」

ふたりはすっかりなかよくなったみたいだ。

⑦「おばさんもおじさんも、おれらの大切な応援団なんで、これからもよろしくお願いします！」  
心からそういえてよかった。

和馬はタツツと顔を見合わせて、えへへ、とわらった。

(吉野万理子『雨女とホームラン』(静山社)より)

## 問一

1

4

に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、やんわりと

イ、なかなか

ウ、ざわざわ

エ、ちらちらと

オ、ほんのり

問二 ～～～線部A～Cの（ ）にあてはまることを次の中から選び、適切な形に直して答えなさい。

- A 「長くする・縦に振る・ひねる・すくめる」
- B 「見張る・まるくする・白黒させる・こらす」
- C 「かく・かかえる・痛める・冷やす」

問三

——線部①「タツツにくわしく話すところ気がしていたからだ」とあるが、そのようなタツツの考え方はどのようなところに表れているか。文中のことばを用いて、四十字以内で答えなさい。

問四

——線部②「和馬は大きな声でいった」とあるが、このときの和馬のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、自分たちは負けるのではと不安になっている仲間を励まし、元気づけようとしている。
- 2、自分がよく考えて行ったことをすべて否定されたように感じ、怒りを覚えている。
- 3、自分の考えたことやとった行動に間違いはないと自信を持ち、成功を確信している。
- 4、自分のしたことを後悔したが、明るくふるまうことでそれを打ち消そうとしている。

問五

——線部③「みんながあいまいにうなずいた」とあるが、このときのみんなのようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、本当は反対だが、それを言うときんかになるので黙ってしようと考えている。
- 2、和馬の話を理解したわけではないが、もうどうしようもないとあきらめつつある。
- 3、疑問は残るけれど、頼りにするエースの言うことだから信じてみようと思っている。
- 4、和馬の言うことに納得したわけではないが、三尾の勢いに圧倒されてしまっている。

問六 ④ に入る語句を文中のこたばを用いて二十字以内で答えなさい。

問七 — 線部⑤「きみらがこの一か月、もうれつに努力してきたこと」とあるが、その一例となる努力する姿勢が表れている一文をここより前から探し、初めの五字をぬき出しなさい。

問八 — 線部⑥「和馬たちは、思わず顔を見合わせた」とあるが、このときの和馬たちのようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、しかられると思つたのに、意外にも自分たちの努力を認めてくれたことに驚おどろいている。
- 2、監督の思いがけないほめことばに、どう反応してよいかわからず困まどつてしまつている。
- 3、怒おこられるとばかり思つたのに、がんばつたと言われたことで逆に不安になつている。
- 4、大差で試合に勝つたおかげで監督に初めてほめられて、思わず照れてしまつている。

問九 — 線部⑦「心からそういえてよかつた」とあるが、このときの和馬のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、今日の試合に勝つたのはふたりのおかげだし、これからも応援してくれることを期待している。
- 2、試合に勝つた喜びに舞い上がり、これからも自分たちの勝利を見守つてほしいと思つている。
- 3、自分たちの力に自信を持ち、素直すなおな気持ちでふたりに応援してもらえることを喜んでる。
- 4、縁起をかついでいた自分たちの考えを反省し、二度とそんなことは考えまいと心に誓ちかつている。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

僕は、中学生の頃、学校に行くとき自然に道化を演じてしまうようなところがあった。朝は「今日は、絶対にまじめに過ごさず」と心に誓って登校するのだが、例によって周囲を笑わせたり、悪ふざけをして先生から叱られたりして、帰り道、友だちと別れて一人になると、「またやらかしちゃった」「なんでこうなっちゃうんだ」などと自己嫌悪に陥りながら、「明日こそは、まじめに過ごさないと」などと、自分との対話をしていたのを覚えている。

だれにも言えない心の中の葛藤をめぐって、ああだこうだと思いう存分やりとりできる相手は、もう一人の自分しかない。

自己意識の高まる青年期は、このように自己との対話が頻繁に行われるようになる時期と言える。

でも、ずっと自分と向き合っているのもきつい。自分の未熟さ、自分の不安定さ、自己嫌悪、逃れようのない人間存在の個性、孤独感……。そういったものと絶えず向き合っていたら疲れてしまう。心のエネルギーが消耗する。

そこで、<sup>②</sup> 気晴らしに走るようになる。

音楽に酔う。小説の世界に逃避する。とくに見たいものがないのにテレビをつけ、バラエティ番組などを意味もなく見続ける。友だちとしょっちゅう群れておしゃべりする。

こうした気晴らしをしている間は、自意識から逃れることができる。人間は、自意識を麻痺させるための、ありとあらゆる道具を開発してきた。

絶えず人と一緒にいないとダメという人、一人でいられないという人もいるが、それは自分と直面するのを避けるためのひとつの戦略と言ってよいだろう。

最近では、本を読む若者が少なくなっているが、その代わりにインターネットの世界に逃避する人が非常に多い。何もしないでいると、つい自分と向き合ってしまう。そこで、暇さえあればスマートフォンをいじり、検索をしたり、SNS

をしたり、ゲームをしたり、YouTubeで面白<sup>おもしろ</sup>い動画を見たりして、自意識が活性化<sup>すき</sup>する隙<sup>あひだ</sup>を与えないようにしている。絶えずだれかと会っていないと落ち着かない人も、( ) 必要<sup>ひつよう</sup>にSNSでやりとりしている人も、用もないのに癖<sup>くせ</sup>のようにインターネットで検索している人も、本人ははつきりと意識していないかもしれないが、自意識を麻痺<sup>まひ</sup>させようとしているのだ。そうでもしないとやっていられない。平常心を保てない。自分と向き合うのは、それほど重たいことなのだ。大人だってそうだ。アルコールに溺<sup>おぼ</sup>れるのも、社交<sup>ざう</sup>にうつつを抜<sup>ぬ</sup>かすのも、仕事中毒になるのも、スマートフォンを片時も手放せないのも、自意識を麻痺<sup>まひ</sup>させるため、自分の内面から目を逸<sup>そ</sup>らすためと言ってよい。

自立ということに関連して、個の確立<sup>たつち</sup>というようなことも言われる。 1、親からの自立という青年期の課題をはる

③ かつて「A」してしまった僕でさえ、個として閉じた形で自分が確立<sup>たつち</sup>されている気がしない。個の確立<sup>たつち</sup>などというのは、日本人にとっては無縁<sup>むえん</sup>のことなのではないだろうか。

子ども時代のように親の管理下に置かれて動くのではなく、青年期になったら自分で考え、自分で判断して動く。それはわかる。けっして僕たちは、他者に対して閉じられた個として生きているわけではない。

2、僕が親の管理下から離<sup>はな</sup>れ、親から自立して動き始めた頃、何が僕の行動原理<sup>こうどうげんり</sup>になっていたのだろうか。思い返してみると、語り合う友だちや書物を通して出会った作家・思想家・科学者など、僕が「B」する人や傾倒<sup>けいとう</sup>する人の価値観<sup>かちかん</sup>を基準<sup>きじゆん</sup>に動いていたように思う。親とは違うもの<sup>ちが</sup>の見方や考え方を主張<sup>しゆじやう</sup>するとき、親以外のだれかが僕の中で動いていた。

結局、僕たちは、個別性を自覚<sup>じかく</sup>して生きたらいい。個として他者から切り離<sup>はな</sup>されて生きているわけではない。さまざまな他者の影響<sup>えいきやう</sup>を受けながら生きている。さまざまな他者との関係性を生きている。

相手があつて自分がある。 3、親からの自立というのは、自分で取捨選択<sup>しゆしやせんたく</sup>しながら親以外の人たちの影響<sup>えいきやう</sup>を強く受けるようになっていくことを指すのではないだろうか。

個を生きるのではなく、他者との関係性を生きる僕たち日本人には、他者から独立した自分などというものはない。

4 僕は、欧米<sup>おうべい</sup>の文化を「自己中心の文化」、日本の文化を「間柄<sup>あいだがら</sup>の文化」というように特徴<sup>とくちょう</sup>づけている。

- 1 そのような文化のもとで自己形成してきた欧米人は、何ごとに関しても他者に影響されず自分を基準に判断し、個として独立しており、他者から切り離されている。
- 2 「自己中心の文化」とは、自分の言いたいことを何でも主張すればよい、ある事柄を持ち出すかどうか、ある行動を取るかどうかは、自分の意見や立場を基準に判断すべき、とする文化のことである。
- 3 欧米の文化は、まさに「自己中心の文化」と言える。
- 4 何ごととも自分自身の考えや立場に従って判断することになる。

そのような文化においては、他者の影響を受けることは、個が確立していないという意味で未熟とみなされる。

一方、「間柄の文化」とは、一方的な自己主張で人を困らせたり嫌な思いにさせたりしてはいけない、ある事柄を持ち出すかどうか、ある行動を取るかどうかは、相手の気持ちや立場に配慮して判断すべき、とする文化のことである。何ごととも相手の気持ちや立場に配慮しながら判断することになる。

日本の文化は、まさに「Ⅰ」と言える。そのような文化のもとで自己形成してきた日本人は、何ごとに関しても自分だけを基準とするのではなく他者の気持ちや立場に配慮して判断するのであり、個として閉じておらず、他者に対して開かれている。ゆえに、たえず相手の「Ⅰ」が気になり、できるだけそれに応えようとするのである。

そのような文化においては、他者に配慮できないことは、自分勝手という意味で未熟とみなされる。

「Ⅱ」においては「他者の影響を受ける」として否定的にみられることを、「Ⅲ」においては「他者に配慮できる」というように肯定的に評価するのである。

そのような「Ⅳ」においては、親からの自立を果たすためには、親との間柄に代わる重要な間柄が必要となる。関係性を生きた僕たちとしては、何らかの関係性がないと困る。自分を動かす行動原理がなくなってしまう。だからこそ、青年期には、お互いの内面を共有できるような親友を強く求めるのである。

（榎本博明『「さみしさ」の力 孤独と自立の心理学』〈ちくまプリマー新書〉より）

問一

1

4

に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、そこで                      イ、しかも                      ウ、では                      エ、ゆえに                      オ、でも

問二

【A】～【C】に入る二字のことはを次の漢字を組み合わせてそれぞれ作りなさい。

成   待   長   達   感   期   動   共   発

問三

線部 a・b と同じ用法のものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「の」

ア、父は歩くのが速い。

イ、綿のよ<sub>う</sub>な雲。

ウ、桜の花の咲くころ。

エ、外国の友人に知らせる。

b 「に」

ア、映画を見に行く。

イ、会場は静かになった。

ウ、提案に賛成する。

エ、事態はさらに悪化した。



問四

~~~~線部x「絶えず」がかかる部分を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。  
 ~~~~~ア~~~~イ~~~~ウ~~~~エ~~~~オ  
 絶えず 人と 一緒に いないと ダメと いう

問五

~~~~線部y「( ) 必要」の( )には打ち消しの意味を表す漢字一字が入るが、それは次のどれと同じか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、( ) 解決      イ、( ) 条件      ウ、( ) 常識      エ、( ) 完全

問六

~~~~線部z「うつつを抜かす」の本文における意味として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、心がわくわくする      イ、夢中になる      ウ、時間を費やす      エ、一生をささげる

問七

本文には次の一文がぬけている。どこに入れたらよいか、この直前~~~~にくる五字をぬき出しなさい。

しかし、それでも他人の影響は受け続ける。

問八

……線~~~~で囲まれた部分の1〜4を正しい順序に並べかえ、番号で答えなさい。

問九

|   |
|---|
| I |
|---|

~~~~

IV
----

には、X 自己中心の文化、Y 間柄の文化 のどちらかが入る。適切なものをそれぞれ選び、

記号で答えなさい。

問十

——線部①「道化を演じてしまうようなところがあった」とあるが、それはどのような形で表れていたか。文中のことばを用いて二十字以内で答えなさい。

問十一 ——線部②「気晴らしに走るようになる」とあるが、それはなぜか。その理由を文中のことばを用いて四十字以内で答えなさい。

問十二 ——線部③「個の確立などというのは、日本人にとって無縁のことなのではないだろうか」とあるが、その理由を述べている部分を「くから」に続くように文中から四十字以内で探し、初めと終わりの五字をぬき出しなさい。

問十三 本文の内容と合っているものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、気晴らしをして自意識から逃れようとするのは、青年期の特徴である。
- 2、青年期に自己との対話をすることは、私たちの成長に必要なものである。
- 3、私たちは、親から自立しても他者からの影響を受け続けることになる。
- 4、「自己中心の文化」は、他者に対する配慮をしない未熟な文化である。

国語 解答用紙

受験番号
氏 名

得 点

問一	⑤	①			
問二			⑥	②	
問三			③		
問四			④		

事  
難


問一	1				
問二	A				
			B		
問三			C		
問四					
問五					
問六					
問七					


問一	1				
問二	A				
			B		
問三			C		
			a		
			b		
問四					
問五					
問六					
問七					
問八					
問九	I				
			II		
			III		
			IV		
問十					
問十一					
問十二					


から。 問十三